

滑稽俳句と川柳（二）

秋尾 敏

たしかに、発生期には川柳は付句であった。

前句付が流行し、七七に五七五を付けたり、ときには五七五に七七を付けたりして遊ぶのだが、その中で、前句がなくても意味が通じて面白いものが独立して川柳になった。

しかし、いったん川柳というジャンルが出来てしまえば、はじめから自立した川柳を作ろうとする人が出てくる。そうなったらもう川柳は付句ではない。

では、発句と川柳の違いは何なのか。

俳諧の付句には、季語のある句とない句とがあるから、当然、川柳にも季語のあるものとないものとが発生する。したがって、季語のあるなしで発句と川柳を区別することはできない。

そこで、切字のあるものが発句ということになったのだが、切字がなくても留め（切れ）のある句はいくらでもあって、その区別がはっきりしない。

さらに、前句付から独立した五七五、つまり川柳が「発句」と呼ばれたことさえあった。

文化十四年（一八一七）に『滑稽発句類題集』（金太楼・松鱸編）が刊行されている。二編まで刊行され、さらに天保時代や明治時代に後印が刊行されている。私が持っているのは明治時代の六冊本と、『近代日本文学大系』（国民図書・昭和3年）に納められた活字本の二つである。つまり、かなり読まれてきた本だということである。

松鱸は、二世川柳の弟子で、大阪に江戸川柳を広めた人として知られる。下巻の末尾には「元祖柄井川柳辞世」として〈八重がきの外に茂りし川柳〉が置かれ、続いて「東都四代目川柳翁風流庵社中」の「祝言」として〈邯鄲は物かは御代の高枕〉と記されているから、「滑稽発句」と「川柳」は同類ということである。

これはおそらく、江戸で流行っていた川柳を上方に持って行くにあたって、い

きなり「川柳」と言っても知名度がない。そこで「滑稽発句」という言葉を生み出したものと推測される。

とすれば、滑稽発句とは川柳そのものであって、そこに区別はないことになる。

「滑稽発句」には無季の句も多く含まれているから、当時、違和感を持った人がいたかもしれない。けれど、無季の発句というものも江戸時代に確かに存在したのである。例えば桜井梅室の『梅室家集』（天保 3 年）には、春夏秋冬の後に「無季の部」があり、それも発句だとはっきり書いてある。

さすがに「滑稽俳句」という言葉は江戸時代には見当たらないが「滑稽発句」はあった。このことは記憶しておいていただきたい。

では、「滑稽発句」とはどのような句だったのか。

時鳥白いさしみはもう喰へず（初鱧）

売れるほど飴屋は貌をふくらかし（商人）

相性は聞きたし年はかくしたし（恋）

富士つくば虹天秤に引つかける（天象）

括弧の中はその句の題である。一、三句目は自の句、二句目は他の句、最後は場の句であろう。私などの知識ではよく分からない句も多いが、題によって自他場の傾向が決まっているようにも思う。